

# トーマス・カイン 29歳

## あなたの物語

——視界が徐々にひらけ、俺は息を吸う。立ち上がると、外気は冷たく、ひんやりとしていた。

目に入った情景はひどい惨状だった。『SENTINEL 515』(センチネル515)と書かれた飛行機の機体は腹を裂かれた獣のように割れ、翼は折れ、外殻は黒く焦げていた。俺が座っていた椅子の周りにはかろうじて無事だったようだ。耳に残っているのは大きな金属の軋み。先ほどまでその音を聞いていた筈だが、今は風の音しか聞こえない。破片につまづいて転ぶ。

「……っ」

腕を怪我してしまった。赤く流れる血を見ながらぼんやりと思い出す。そうだ、俺は、飛行機に乗っていて——。

ぐると周囲を見渡す。同乗者だったはずの連中は、すべて白骨になっていた。肉片も血もない。椅子に座ったまま、あるいは床に崩れ落ちて、ただ骨と服だけが残っている。白骨が着ている制服に名札がついていた。見覚えがある……気がする。つい先ほど？ 言葉を交わしたはずだ。だが顔も名前も、分からない。

「——俺のせいだ」

何故そう呟いたのかは分からない。ただ、こうなった原因は自分にある、という気がしてならない。

自分が飛行機に乗った理由を思い出そうとするが、記憶は途切れている。しかし、周りに生きている人間は見当たらない。こんな状況では誰かに聞くわけにもいかず、なぜ墜落したのか分からない。

改めて自分の身の回りを確認してみる。左腕には銀色の時計を着けていた。珍しいデザインだ。日付も表示されている。

「1989年10月12日、2:10……」

なぜか違和感を覚える……。

ポケットを探ってみた。胸ポケットに財布が入っている。中には一枚の写真が入っていた。笑っている女性の姿が写っている。パーマをかけた茶髪、柔らかな微笑み。白いワンピースを着ている。だが……誰だ？ 名前を呼ぼうとするが、喉に引っかかって出てこない。確かに大切な人だったはずなのに。

財布には身分証も入っていた。

「トーマス・カイン——1960年生まれ。29歳……」

名前すらしっくりこない。ただ、29歳という年齢については、確かにそうだろうと感じられた。

呆然と滑走路を進んでいくと、空港の端に着いた。金網が大きく破けている。周囲を見渡すと、古い型の車(シボレー)が停まっていた。……なぜこんな場所に？中を見ると、鍵が刺さっている。鳥の羽の紋章が描かれたキーホルダーが付いた鍵だ。俺は運転席に身を滑り込ませた。エンジンは一発でかかった。運がいい。車を走らせると、バックミラーに映る壊れた機体が遠ざかっていく。とにかく誰かに助けを求めなければ。赤いシボレーで州間道を走る。標識、広告、建物……すべてが見慣れない。

5分ほど車を走らせると、ラジオから「REMEMBER……」と音声聞こえてきた。ラジオの周波数はどこにも合わせていない筈だが、なぜ……。と、同時にモーターの看板のネオンが目に入る。ジジッと音を立てて、灯りは消えかけている。そこには、ラジオから聞こえた単語と同じ『REMEMBER』という表示があった。誘われるように駐車場に車を停めて、モーターの中に入る。受付で老婆が怪訝そうに俺を見た。……服が汚れているからだろうか。

「テオどうした……いや、すまない。人違いだね」  
「……？ 助けてくれ。事故に遭った。飛行機が……墜ちた。みんな骨に——」  
「骨？」

老婆は鼻で笑った。

「酔っ払いはお断りだよ」  
「飲んでない。信じてくれ。誰かに……保安官でも——」

「保安官は朝にならないと呼べないよ。さあ、酔いを醒ましとくれ。現金前払いだ」

老婆は俺を酔っ払いだと決めつけ、これ幸いとこのモーターの宿泊者にしようとしているようだ。

「あんたみたいなの、時々来るんだ。何かに追いかけているだの、宇宙人を見つけただの。とにかく明日になって落ち着いたら話しとくれ」

「嘘じゃない。俺は——」

だが、続きが出ない。なぜ俺は飛行機に？ なぜ墜落した？ そんな事すら話せなければ、信じてもらえないことは明確だった。老婆は肩をすくめ、鍵をカウンターの上で転がす。

「泊まるか、泊まらないか。選びな」  
「……泊まる。今夜だけでいい」

財布の中の金を渡すと、老婆は無言で鍵をこちらに滑らせた。そこには『208号室』と部屋番号が刻まれていた。

———  
STOP！指示があるまで次のページを開かないでください  
———

## 目的

- 目の前に居る男の正体を探る。
  - 自分の正体を探られすぎないようにする。
- ※男の事を信用しきることは出来ない。注意しよう。

-----  
**STOP ! 指示があるまで次のページを開かないでください**  
-----

## 目的(追加)

先ほどの目的に加えて、新しい目的が追加された

- 投票フェイズで、白骨化した人物を殺した犯人に投票する。  
※真相を探るためには、状況に応じて、自分の正体や気づいた事について共有する必要があるだろう。